米倉斉加年さんを悼む

昨年八月に、米倉斉加年さんが逝去されました。

米倉さんの作品「大人になれなかった弟たちに……」が、中学校『国語』教科書に登場したのは昭和六十二年。決して風化させてはいけない戦争の悲しさや、母子の情愛を生徒や先生方に伝える作品として、今もなお多くの反響をいただいております。

今回の特集では、以前小社ウェブサイトのインタビューで語っていただいた米倉さんの声を、また、東日本大震災のとき、被災地の子どもたちに向けて書いていただいたメッセージを掲載しました。

ご子息で俳優・演出家の米倉日呂登さん、絵本『おとなになれなかった弟たちに……』（偕成社）の編集を担当された安彦道代さんのお二方にも、米倉さんのお人柄が偲ばれる文章を寄せていただきました。

米倉斉加年（よねくらまさかね）

一九三四年、福岡県生まれ。俳優・演出家・絵本作家。五七年、劇団民藝水品演劇研究所に入り、舞台・映画・テレビなど多方面で活躍。二〇〇〇年に劇団民藝を退団。〇七年、劇団「海流座」を旗揚げし、全国各地で公演を行っていた。また、絵本作家としても活躍。一九七六年の「魔法おしえます」（偕成社・七五年）と、七七年の「多毛留」（偕成社・七六年）でボローニャ交際児童図書展グラフィック大賞を連続受賞。二〇一四年八月二十六日、福岡市内の病院で逝去。八十歳。

「手に取る子どもがいれば伝わっていく」

二〇一〇年十二月、小社ウェブサイトのインタビューで、米倉さんが作品を書かれるに至った経緯や、先生方、生徒たちに対する思いをお話しくださいました。

――「大人になれなかった弟たちに……」を形にしようとしたのには、どんな動機や衝動があったのでしょうか。

米倉　僕は、小学校のときから文章を書くのが苦手でした。当時は「綴り方」という教科があって作文を書くんだけど、いつも二・三行ほどしか書けなかった。いちばん長いものを書いた記憶があるのは、新制中学の校内弁論大会のときですね。タイトルは「弟の死」でした。それが、今思えば「大人になれなかった弟たちに……」の原型かもしれない。

弁論大会のときは校内で一位になったのですが、僕にとっては複雑な思い出なんです。そのときの原稿は、実は、先生にほとんど書き直されたものだったからです。僕は、弟が死んだことを書きたかった。そのところは確かに残っていたけれど、「種」のところは先生の手によるものだったということを覚えています。細部は構成やエピソードは先生の手によるものだったということを覚えています。細部は忘れてしまいましたが、「寝転がって、『ヒロユキ』と、弟の名前を青空に書いた」というエピソードがありました。実際、僕はそんなことをしたことはなかったんだけれどね（笑）。

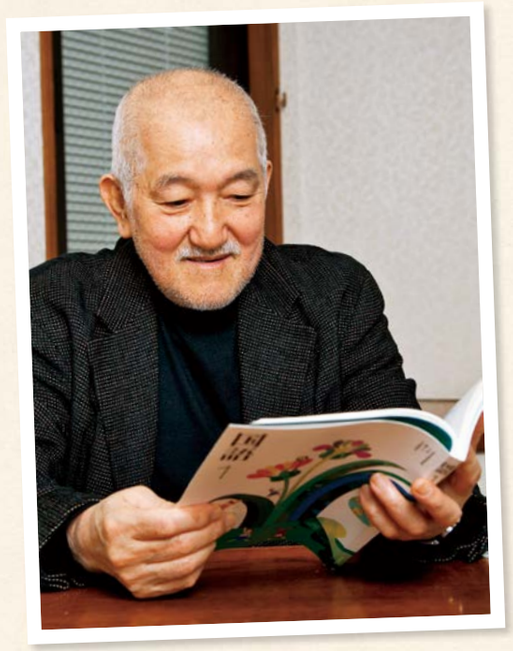
――そのような体験があったのですね。

米倉　僕の中にある戦争の記憶とは弟のことなんです。その「種」を、先生の手で再構成していただいて弁論大会に出た。

あるとき、よく行く宿屋に滞在して、絵を描いていたんです。売れる絵を描かないと食べていけないから描いていた。だけど、そのときふいに、「やっぱりいかん」という思いが湧いてきたんです。「昔の、小学校の頃の絵を描かないと」と。「自分の『戦争』を記しておこう」という気持ちになったんです。誰かに何かを教えようという気持ちはありませんでした。「僕の弟の名前は、ヒロユキといいます。」という、あの書きだしが自然に出てきたんです。そのとき、僕は「四年生」の自分になっていました。どこかに転校していったときに、新しい友達に「僕には弟がおって……」と話すような感じで。

――そのときは、誰かに何かを伝えるという目的はなかったんですね。

米倉　「誰かに伝えよう」というのはありませんでした。僕が書きたいから書いたん



です。というか、何か言っておかねばならないことがあるような気がしていました。押しつけるわけにはいきませんが……。手に取る子どもがいれば伝わっていく、そういうものじゃないでしょうか。「伝わっていく」というのは、後の人が伝えるかどうかの問題であって、作った僕の問題じゃないんです。

僕らは、あったことを残すことはしなきゃいかん。伝わらなくとも、誰も手に取らなくとも、置いておかなきゃいかん。そういう思いでこの作品を作りました。僕の中では、「ミルクを盗み飲みした」という、いちばん恥ずかしくて言えなかったことを書かなければいけなかった。

でも、書いて三十年も過ぎてくると、いつの間にか細部を忘れているんです。書いたときには、子どもの目のまま、鮮明なまま書いていました。でも、今、これを読むと、「そうだったのか。自分が言っているんだから本当だろう」という感覚なんです。強烈な部分は忘れてはいないけれども、細部は消えかかっている。記憶の角が取れて、丸くなってくるのでしょうか。それをボケるというのでしょうか。

——教科書掲載の依頼があったときは、戸惑われたと聞いています。

米倉　いちばん多感な十歳のときに、全てが一夜でひっくり返って、民主主義の世の中になるという経験もしている。だから、「教科書」とか「学校」のことを信じろと言われても、どこかで信じられない部分がある。また、ひっくり返るんじゃないかと思って。

僕が自分の弟のいちばん大事なことを書いたものですから、そういう場所に載せられるのは困ると思いました。それで、教科書掲載の話がきたときには戸惑ったんです。

「一週間、考えさせてください」と言いました。でも、僕はね、「一週間」とか「三日」とか言うけれど、言った瞬間には心を決めているんです（笑）。誰も読まないかもしれないと思って書いたんですが、多くの子どもたちに読まれるのなら、こんなにうれしいことはない。そう思って、僕は了承しました。

——初めて掲載してから、今年で二十五年目です。

米倉　支持してくださっている先生方、「読みたくない」と言わずに黙って読んでくれた子どもたち、そのおかげでこれが生き続けているんです。

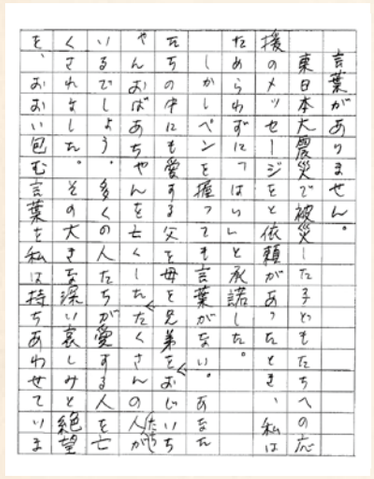
世に出しておいてよかったなと、そう思います。もう僕から完全に離れて、僕のものじゃない。ぽっと芽を出した種が、なんだか僕も知らない花をたくさん咲かせ、そのさまを見ることができる。受け取った側が、育ててくれたという思いです。そのことにたいへん感謝しています。

（二〇一〇年十二月収録）

光村図書ウェブサイト「シーズン・インタビュー 2011年冬」http://www.mitsumura-tosho.co.jp/season/2011_winter/01.html

声高らかに〈希望〉をもって〈生きる〉ことを語ろう

東日本大震災の直後、「国語教育相談室　臨時号」を発行した際には、被災地の子どもたちに向けた励ましのメッセージをいただきました。



◀自筆の原稿

言葉がありません。

東日本大震災で被災した子どもたちへの応援のメッセージをと依頼があったとき、わたしはためらわずに「はい」と承諾した。

しかしペンをにぎっても言葉がない。あなたたちの中にも愛する父を母を兄弟を、おじいちゃんおばあちゃんをなくした、たくさんの人たちがいるでしょう。多くの人たちが愛する人をなくされました。その大きな深い悲しみと絶望を、おおい包む言葉をわたしはもち合わせていません。あなたたちを、どうはげましたらいいのか、どうなぐさめたらいいのか――。

すべてをなくした人たちに〈希望〉をあたえる言葉をわたしはもたない。

そのとき、テレビで被災者の青年が語った。「今度の大津波では、いい人間がたくさん死んだ。多くの人たちを助けて、自分は死んでいった――。助けられ生き残ったわたしたちは、すてきな人生を生きなければ、なくなった人たちに申し訳ない。わたしたちは死んだ人たちの分も生きなければならない」。こんなことをである。

わたしは初めて納得した。今まで外から被災者をはげます言葉をたくさん聞いたが、心にひびいてこなかった、が、青年の目のかがやきを見ていると納得した。避難所からの発信の中に真の言葉があった。生きる言葉は被災者の中から生まれてくるのだ。

それを証明するように、テレビの画面にあなたたちを見た。母校が避難所となった中学生たちが先頭に立って働いていた。

あなたたちの笑顔は、がれきの荒野にさいた花だ。あなたたちの明るい声は心をいやす音楽だ。手を差しのべ助けなければならないわたしが、あなたたちに救われ教えられる。

この大災害から立ち直る原動力になるのはあなたたちだ。ふるさとを復興できるのはあなたたちだ。大震災でなくなった多くの人たちがあなたたちの中に生きているのです。あなたたちが元気に生きることが、ふるさと復興の第一歩です。その第一歩は、ひいては新しい日本をつくり、世界の平和へとつながる。

今、声高らかに〈希望〉をもって〈生きる〉ことを語ることができるのはあなたたちをおいてはいない。

明けない夜はない、必ず朝は来る。

（二〇一一年四月）

読み続けたい、読み続けてもらいたい

俳優・演出家　米倉日呂登

俳優・演出家。一九五八年、福岡県生まれ。八三年「劇団民藝」入団、二〇〇一年より海流座（米倉斉加年一座）に参加。一二年から民藝座付作家・大橋喜一（故）と「東京大空襲」を共同作成。近年は地方において劇団創設や海流座との合同公演の指導、プロデュース。

この『おとなになれなかった弟たちに……』の表紙、ヒロユキの絵は、最後に描き加えられました。この絵は、モデルとなった私の長女が生まれてから描き加えられたものです。この子は私の父、米倉斉加年にとって初孫でしたから、父にとっては久々の赤ん坊であったのでしょう。この子を見て父はすぐにスケッチを始めたそうです。そして、この子の母親、つまり私の妻に、「ヒロユキも同じように髪の毛が立っていたんだよ」と語ったそうです。

父が亡くなる直前に、私は父にこの本の朗読を私にもやらせてほしいと頼みました。父は「いいよ」と一言で許可をしてくれました。この『おとなになれなかった弟たちに……』の朗読は教科書に掲載されていることもあって多くの方がやられているようです。ですが、父の朗読は特別でした。そもそも朗読の一番は作家による朗読だと、父と私の師匠である宇野重吉より教わっていましたし、父は朗読の名人と言われていた人です。朗読の基本は作品の理解力です。読む力です。宇野重吉より継承されたそれが父の力でした。私はそんな父の朗読を最も近くで最も多く聞くことができました。だからといって父のように私も朗読をしようと思って、朗読をさせてほしいと言ったわけではなかったのですが……。

父が死んで、私に朗読をする機会が廻ってきました。父の朗読を思い出し、祖母を思い出し、制作当時の家族を思い出して、朗読をしました。淡々と、そして集中して読みました。しかし、再び朗読する機会があったときには、想い出が集中を妨げ、涙を誘いました。父は祖父の死や祖母の死に際しては感情を抑えられず、絶句し嗚咽していましたが、この『おとなになれなかった弟たちに……』の朗読では絶句はおろか、感情的な表現になったことはありませんでした。しかし私は感情に流されそうになりました。

この本が出版されたとき、あまりに私的で赤裸々ではと思いましたが、そうではなかったようです。この絵本の絵は鉛筆デッサンです。父の記憶の忠実なデッサンなのでしょう。事実を淡々と描いたこの絵本には感情が入る余地はないのです。

この本には父の母（私の祖母）に対する深い愛があります。それは母親の深くそして強い愛に対して、子からの感謝の気持ちが愛として表されたのかもしれません。そしてこの絵本は、もとは米倉斉加年が、母に捧げた愛の証なのですが、絵本として作者の手を離れ独立し、今では多くの方の心に残る作品となりました。

私は米倉斉加年の息子としてではなく、戦争を知らない、ひとりの人間として、この絵本を読み続けたいと思います。そしてこの絵本の朗読者として、この本をもっと多くの人に知っていただけるように、淡々と、そして集中し、忠実に読み続けたいと思っています。

米倉さんのキーワード

絵本『おとなになれなかった弟たちに……』編集者　安彦道代

桜美林大学非常勤講師。一九四五年、神奈川県生まれ。六七年偕成社入社、絵本編集を担当する。「多毛留」「おとなになれなかった弟たちに…」など米倉斉加年著の作品編集を手がける。その他「ざっちゃんのまほうのて」など、数多くのロングセラーを送り出している。

米倉家の居間は、いつも日溜まりのように温かかった。米倉さんは定番の椅子に座り、夫人のテルミさんのほか、芝居の仲間やお友達、娘の加乃さんが一緒のことも多かった。ある時はお孫さんたちが出たり入ったり。犬のマフラーが寝そべり、時には猫たちもいた。

仕事の打ち合わせが終わってお茶をいただくのが楽しみだった。この場を仕切るのはテルミさんで、話は縦横無尽にあちこちに飛び、私は笑い転げた。米倉さんはテルミさんの話を面白がって聞いていることが多かったが、ある言葉で突然饒舌になる。キーワードは、「差別」と「戦争」だった。スイッチが入ると、ちょっと掠れた温もりのある声で訥々と、話すほどに力が入り頬が染まる。

この二つは私が編集者として関わった絵本にも繋がっている。一つは『多毛留』であり、もう一つは『おとなになれなかった弟たちに……』（共に偕成社刊）である。

『多毛留』は「むかしむかし倭ノ奴ノくにの奴津に阿羅志という漁師のおったげな」で始まる「日本と朝鮮の血の歴史」（米倉さんの言葉）を描いたものだ。出版は一九七六年十一月。この頃、米倉さんは金芝河の『銅の李舜臣』や『鎮悪鬼』、『赤ひげ』など立て続けに舞台の仕事をされている。地方公演の旅先の宿や、自宅で朝の少しの時間を見つけて描いた。

『多毛留』の原画をいただいたのも地方公演から帰った後だった。大きな筒からくるくると巻いた紙を取り出すと、そこには玄界灘を小舟で連れ帰った美しい乙女と阿羅志が抱き合う哀しくも華麗な世界が広がっていて、私は思わず息をのんだ。絵の向こうに米倉さんの嬉しそうな、同時にどうだ、というような自信に溢れた顔があった。

『おとなになれなかった弟たちに……』は、『多毛留』から七年後の出版である。次の絵本の話は何度も出ていたが米倉さんは腰を上げなかった。ある日突然、戦争中に弟のミルクを盗み飲んだ体験を描くと言い、あっという間に描き上げた。それは私にとってのあっという間で、栄養失調で死んだ弟の話を描くのに米倉さんは七年の時間を必要としたのだ。モノクロの素朴な絵だった。わら半紙のような紙に印刷してほしいというのがたった一つの注文だった。

訃報を聞いたのは白神山地を旅している時だった。マザーツリーと呼ばれている樹齢四百年のブナの大木がぼやけて揺れた。ざわざわと鳴る梢を見ながら思った。たとえ別の世界に旅立たれても、本が出版され教科書に掲載される限り、米倉さんの強烈な思いは時を超え世代を超えて残り続けるに違いない。読者となった人々が生き続ける限り、米倉さんの思いも生き続ける、と。